



亥子

住吉にて

ゐの子餅はや住乃江につきにけり  
うけもちの神や亥子をフケはしめ

落葉

枝城を落ふれて行葉武者哉  
蛛の巣に風をつなける木乃葉哉  
高雄なり今ハ草履乃下紅葉  
紅葉ハ花より色のご春かな  
木からしに色かへぬ松や大こゝろ

時雨

季吟子をまねきて

染はやと松に北村しくれ哉  
和哥の浦時雨の二字や通り題

如帆追善に

きくやいかに莓の下にも時雨の句  
一二三四くれふるなり九十月  
から笠や時雨にひらく花のりん  
風ハ雲乃手引てはしる時雨哉  
冬されハ只わるされ乃しくれ哉  
降めくる時雨や遊行柳陰  
須弥山や時雨乃めくる車坂  
せんたくを木葉衣もしくれ哉

野代季  
俊吟  
能

秋田眞壁氏

山形住

大坂露川氏

京安福氏

秋田櫻尾氏

夕正

勢州

少任

蝶口

葉古

野代柱

同小玉氏

成

山田三

秋田住

野代守

信

秋田堀田氏

昭吉

久忠

信

一四オ

一四ウ

一五オ

雪こんこ先案内をしくれ哉  
笠ぬひの里に宿かる時雨哉

くる雲やふりミふらすミ村時雨  
小野にふる音やたかむら村時雨  
屋ねの谷川音高し小夜時雨

松に時雨あつるハ杓子定規哉  
俳諧をよみて時雨乃ちん句哉

松に時雨蜂やさすらん牛の角  
哥なふて筆さへ松を時雨哉

壁に耳それを洗ふやよこ時雨  
戸袋や雲を引出す夕時雨

木履かせ時雨降をくなら金剛

帰花

藤谷にて

帰花咲や小春乃藤か谷

鉢乃木や其本領に帰り花

風の神の留守と知てや帰り花

年にまれな火とも待けり帰り花

色あけか浅黄桜乃かへり花

玉つはき竜宮よりや帰花

鐘梅や神乃供してかへり花

口切

壺の口切目たゝしき茶請哉

同山本氏

同大和田氏

野代金沢氏

秋田

福知山生

山形生

勢州未

秋田

夏田

三

三

友

桂

鹿

隨

吉

雲

林

覚

口

雲

保

信

静

葉

軒

友

辰

信

雲

蝶

少

桂

幽

明

一六ウ

一六オ

一五ウ

口切にあすハ雪とそふる茶笥  
口切や茶巾さらして越乃雪

十夜

静之養父乃忌中ニ

つとめする時も初夜後夜十夜哉

念仏の念は一念十夜哉

南無仏それ西方八十夜哉

心かけまいる一ねん一夜哉

御影講

けふひらく戸帳や二重御影講

お名ハ四方にもり物高し日蓮忌

恵美須講

神ハ留守跡の祭かあひす講

頭巾

頭巾こそ頭乃雪の氷室山

すミ頭巾山高ふして耳寒し

かつくてふ頭巾の色〔虫食イ〕

そめ色の山なりきたハすミ頭巾

山も更に顔にうこく頭巾哉

花とみる雪虫頭巾乃〔虫食イ〕

衾 付紙子

まつしかれと祈らぬ物をかミ袋

あかくりもそくゐを駕の衾哉

固元 桂葉

正立

秋田野代氏（ママ） 友富 万慶の誤カ

山田住 貞幸 一七オ

ふくち山 久林

野代柴田

正忠

幽明

山田住

貞幸

秋田青木氏

江戸住 牛 一七ウ

石州

克行 吻

保友

三保

桂葉

南部盛岡住

欣応

保友 一八オ

駕籠のふすまや人をぬくめ鳥

かたそきのゆきあひ珠し紙子羽織

十文字や川花かたや染かミこ

ことし又そくふへら也古紙子

あへ川やさゝ浪よするもミ紙子

両面ハ習合和合のかミこ哉

湯婆

さめぬれハ今はた寒きたんほ哉

炭 付炭籠

藁ミても久しく成ぬ炭俵

いけてよもあす迄あらし浅木炭

灰きせてをくや炭火の花曇

茶乃湯にそ炭やならへるすきの友

雪の日につゐて面白し廻り炭

つまれたり池田におゐて炭乃蔵

せうになる炭や頭乃雪とのミ

炭よしと申ハ今此池田かな

くろん坊山にすミかまのあるし哉

炭籠や手向の庭火山乃神

埋火 付火鉢 火燵

埋火やつゝしの花の冬籠

冬ハ炉にかなわに成て咄し哉

筑前 種成

秋保 友之

秋田 全倫

野代 友

角ノたて 定安

酒田住 随吟 一八ウ

朝熊住 三政

伊丹住 三安

筑前 三禱

京折井氏 亦楽

勢州 重安

秋田渡辺氏 久治

正立 一八九オ

武田氏道元にて

冬か申すお座にたまはれぬ火鉢哉  
むつまじき中もへたつる火鉢哉  
時しるや矢倉火燵に太鼓炭  
しろ炭にあくるハ矢倉火燵哉  
頭巾とハいつれか先に置火燵  
寒き日ハ誰も身よりのたか火燵  
火桶こそやも男の手かけ物  
桐火桶千載集乃窓に寒し  
風ふせく鉄炮さまや丸火桶

網代

はり出しやいはゝ網代のすみ矢倉

鈔

朝平やいさゝ波より志賀乃浦

初鯨

汐風や吹上の浦乃はつ鯨

千鳥

取つかふ嶋かなしとや千鳥かけ  
はころひやぬふ袖の浦千鳥かけ  
ぬひ紋や浪乃あや杉千鳥かけ  
友よふや連衆をわか乃浦千鳥  
月なミによるや哥学の友千鳥  
拍子ふむ千鳥や浪乃よせ風流

季大田住・大館吟「九ウ  
千代一

蝶々子

家重

由歌

秋田住

秀雲

眠松

湖春「一〇オ

勢州小津氏

三思

友静

大坂青馬氏

清

大坂住

音「一〇ウ

秋田眞盛氏

幹

酒田住

種

野代住

昌

秋田川村氏

忠利

桂葉

水鳥

水船乃とまり定よつくし鴨  
鴨の足へなかれもあへぬ紅葉哉  
水鳥やたかへ川原をすみ所  
駕一羽誰かぬく沓のかたちんは  
雪沓かしら浪くゝる池乃をし  
誰かはく浪乃緒すけて駕乃沓  
川音の時雨やつれてめくり鴨  
鷹狩 付渡鷹

鷹取や鷹をかけんもをとけななし  
君や興我や雪道鷹つかひ  
めくり逢てミしやそれたか鷹つかひ  
あへせ物ハはなれ物なり鷹乃鳥  
鈴なくハいかで白鷹雪乃中

紫の一もとゆひか鷹のへ緒  
そるゝなよ雲乃通路乙女鷹  
浦にうつや浪爰もとに渡り鷹

夜興

月乃比やさらなりとひく夜興の犬

木綿

白妙に打出てみる木わたかな  
空にしらぬ雪やめくらす綿車

寒草

勢州住 大坂住 高遠住 宮腰住 石州住 酒田住 桂葉

口清「一二オ

友心

平直

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

友友

一芦もたゝぬハ雪のかれ葉哉  
袖垣や冬ハさなから陰の薫

水仙花

花に風あたるをいせん尺魔哉

茶花

まはり手前立るや御茶乃花車  
頭痛氣も忘るゝや茶乃花盛  
茶の花見利休紹鷗いつれもけふ

枇杷花

木のまもる月や撥面ひはの花

室咲花

似春興行に

室咲よその以前とハ柴と花

霜

鎌倉にて

塩壳や頼か跡とふけさ乃霜  
松乃葉ハ霜乃をきなの鬢候か  
玉松乃葉にをく霜やみかき砂  
霜寒ミ起まとはせる朝ね哉  
風ふけハおきつ霜夜や火用心  
霜の句ハ月に詠せし鐘乃音也  
霜乃たてハ雪打あひ乃おしろ哉  
大工いかに独活の大木霜柱

大坂高岡氏  
石州竹田氏

成林  
元正

少蝶  
「一二ウ

秋田無住  
江勝戸  
桂葉  
信心

秋田時田  
入

季吟  
「一二オ

秋時田  
同閑生  
湯沢生  
同種盛  
貞幸  
友索  
友静

算木餅や置まとはせる霜はしら  
霜柱たてるやそとの浜ひさし  
丸太にや月乃桂を霜はしら  
つる立や冬の中墨霜はしら

橋の上の霜のつるきやこそり物

霜の劔これハ寒さの左もし哉  
霜の劔ハ天にミつむね作り哉  
月影や霜乃つるきの薬鏝

霜の袴誰かぬきかけし屏風坂

庭鳥のふむ朝霜やはね袴  
布引乃松葉の霜やあさ袴

霜の袴きつゝなれにし男山

湯の山乃霜ハせんたくはかま哉  
驚坂乃霜ハ狂言はかま哉

丸雪

あられこん小春にまくや雪乃種  
釜のふた根條に霰とかけられたり  
滝の音ハ絶てあられやふり鼓  
宇津乃山や降をく丸雪十団子  
餅雪にまじる丸雪やうるの米  
玉水でもとを作るかあられ酒  
滝浪や間なくちる玉あられ酒

大坂高岡氏  
秋田生氏

成仙  
吉室

大坂一  
清吉

秋田大藏氏  
野直代  
寛久  
吉「一四オ

同直代  
吉吉

秋田加納氏  
松代  
成吉

秋田長氏  
同伊親氏  
野松房  
成徳  
葉「一四ウ

野代生  
安正

秋田生  
梅翁  
大代生  
松翁

越後高田生  
無三  
好「一五オ

ある御城主乃追悼に山方氏貞直と

両吟の百韵せしに

雲龍もうき米こほす丸雪哉

八束穂集発句冬之中

雪

秋田城下梅津氏忠雄殿千句乃時題を給りて

雪の浪立や蒼海まん／＼里

はつ雪をみるハ一はなこゝろ哉

はつ雪ハ木履のはをそみかき砂

琴詩酒乃外にハ何を雪の友

霜よ雪よ面白い事そろへ哉

冬の夜や北から明る窓の雪

つもるらし寝酒数そふ夜の雪

浄慶追悼に

雪の友よ何角におもひ出すはかり

亡父乃一めぐりに

ふかき御恩雪にことはる法事哉

大雪や御室につもる物かたり

遠寺晚鐘洞庭秋月江天暮雪一ふ

くに書たる絵に

雪やこんこ御寺の鐘を月夜哉

足袋乃徳あつきにきすや雪の道

一里塚なき世也けり雪乃道

桂 葉 一五ウ

秋田大橋氏

同 永 春

大 坂 信

秋田梅津氏 淡 水 一六オ

湖 春

石 三 信

季 吟

勢 三 口 信 一六ウ

角 三 吟

秋田貞 全

北国よ道こそなけれ雪の山

馬ハあれとそりにてそ山越の雪

そり引や重荷に小付肩の雪

ない袖もふるふや雪に丸紙羽

世説乃朗心を

愛してそ見るも塩乃目雪の空

大角風満興行に

ふところ乃はな紙幾重谷の雪

袖の雪ふる着をもつて新し

和哥乃友まねくや雪の花すゝき

阿吟に執筆恥かし雪と墨

日影より日陰そ見事雪の花

雪乃花ちるをおしまぬすぎ者哉

木や竹の枝をよせつき雪の花

酔て雪の花にミ乃るや夢の種

しゆるの葉乃雪ハしら地乃あふき哉

二また乃梢の雪や枝あふき

つれ立や三本から笠雪の道

からす丸にて

尾も白し頭もしろしからす丸

雪乃こゑきくや兎の耳我山

風の手や雪をめぐらす茶白山

森 成

酒田住 種

秋田松岡氏 竹 悦 一七オ

酒田住 厚

伊賀住 言

秋田住 季 吟

淡 水

秋田住 風 鈴 軒

大 坂 提 一七ウ

野代住伊久東氏 徳

伊丹住 丸

大坂住 吟

三 禧

京河合氏 就

秀 吟

大 坂 提

季 吟

湖 春 一八オ

秋 桂 成

政 葉

成

王子といふ所にて

雪ふれハ爰もしら壁乃王子哉

降つもる雪や六尺屏風坂

またらなる雪や碁石羽鷹尾山

銀はくか屏風か浦のたひら雪

はたか嶋さとふる雪や一重物

雪の富士やうしろへ落る笠か似た

錦乃小路にやとりける冬

富士や来し比叡や雪の日おもほえず

雪花をミヤコ乃ふしや冬三月

雪花乃塵や目に入ふし乃山

雪のみかくミヤコ乃ふしや江戸鑑

富士山や三国市女笠乃雪

余の山や雲にかけはし雪の富士

白壁や富士を写して雪の宿

松雪

随時興行に

松風や水銀のむて庭乃雪

松風やしらへかへして雪乃吟

降つミこ枝やおり琴雪乃松

雪か雲かいつれ二ツに一つ松

さら／＼とふるあハ雪や茶せん松

銀針か何そとミれハ雪の松

勢州 任口

江州 得友

秋 桂葉

秋 自田牧軒

秋 閑心

保友

桂葉

少魚

田南(名)部生

湯沢住

少蝶

駿州大宮住

秋 友之

秋 梅牛

秋 遲牛

京山下氏

季 吟

秋 如鱗

秋 宜秋

秋 三信

秋 田舎氏

若 家貞

若 治德

雪折の松乃ひゞきや驚の声

すまにて

あら嬉しやあれに行平松の雪

竹雪

雪ふりに竹子笠や願ひもの

おも／＼し大名傘乃けさ乃雪

追善に

有し世やふしておもんる竹の雪

風吹ハおきつしないつ雪の竹

青山氏藤夏殿追善に

雪おれの竹やミしかき世乃恨

つよからぬすかたや雪のをなこ竹

親竹にしなれたかゝるこゆき哉

世の中よ常にも驚毛竹の雪

雪折乃こハさきいつれ松と竹

雪中驚

驚乃足や雪乃波間のミをしるし

身ふるひや我色こほす雪の驚

水に雪とふしんも立ぬすくミ驚

白驚や雪打あひ乃旗かしら

白驚か何そとはハ雪こかし

等驚の養毛や雪乃旅用意

佐々木氏 栄

三 禧

山田住 度

仙北芳貴氏 弘

高 弘

角館住 桂葉

師 英

金沢浅野氏 歌

山田青木氏 己(マ)

野代住 昌治

桂 葉

幽 明

秋田梅津氏 真

酒田住 厚

佐州重 直

若州小浜住 武

今 親

酒田住 敷

射和住 親

清 敷

敷

敷

敷

雪の驚蕤乃毛もよたつばかり也  
又やミんかた野ゝ蕤毛雪乃驚

六花

あられこんこひ目や…一六乃花  
十といひて四つハへりけり六の花  
降つむや三重四重五重六乃花  
四の二ふす鬼ハこれか六の花  
初瀬にて

つき鐘やよその夕暮六乃花

哥仙催して

積る句や三十字あまり六の花  
立てミつとたしても三つ六乃花

銀花

金乃秋銀花の冬や両替座  
塵の世に箔をくけさの銀花哉

帷子雪 付衾雪

寒る身や帷子雪の一ちミ  
あられ敷て帷子雪や白かのこ  
ふすま雪降敷にけり床の山  
此うへにしく物ハなしふすま雪

粉雪 付小米雪

薄雲や是も粉雪をふるひ絹  
おしなへて粉雪やうつむ葉研堀

少蝶 桂葉

勢州正 酒田随 秋田自  
田随 吟 牧 軒

桂葉

三信

江戸一 扇田生  
家 毛 充

野代正 三俊 光

二三オ

秋田以 十二所生 南部親  
助 順 意 勝 昔

秋田 同 政 遲 成  
牛 音

二三ウ

しらくししらせてそふる小米雪

あられ酒作れとやふる小米雪

餅花の種をおろすや小米雪

餅雪

花に餅に見るや貴賤の気ハの雪

雪綿

轆轤峠にて

雪乃綿くり出するくろ峠哉

莓に降かさなる雪や莚綿

雪女

はしめ終たしかならぬや雪女

頭白き鳥さへあるを雪女

目に見えぬ鬼のむすめか雪女

雪仏

雪仏乃せてひくそりや善の網

蝶々子母の追悼に

西の空に有難くこそ雪仏

雪仏光あまねし月やあらぬ

仏とハ何を岩間の雪達磨

獅子に作る雪こそ花の白牡丹

氷

御裳濯や更に氷のはり直し

氷りてや海にもふたを志賀の浦

角ノたて

野代生

同 正

助 音

秋田一 松 入

二三オ

佐州 盛 成

桂 種 葉

秋田藤木氏 友 平

江戸住 慶 豊

二三ウ

信州 桂 葉

桂 友 心

山田度会氏 重 彦

野代小玉氏 重 吉



染川も白川となすこほり哉  
 絹川ははたりひろき水哉  
 糸永へしらあやたゝむこほり哉  
 滝乃糸きれめをむすふ水哉  
 女浪男浪むすふやえんも厚水  
 波のもんぬふや糸水あつ水  
 一点ハ水と水乃へたてかな  
 冬の季をはりつめて持水哉  
 氷る日ハすゝりの海乃汐干哉  
 剣ならハ氷や水のうすみとり  
 角倉何かし泉水乃もとにて  
 石橋よわたらハこれも厚水  
 氷柱  
 雨たり乃琴の緒をたつ氷柱哉  
 針に似て袖垣とつるつらゝ哉  
 軒口にさかるつららや繩すたれ  
 軒口にふくむつゝ(や)らや眉間尺  
 神楽  
 まき銭や鍋乃数ミん大神楽  
 参りあひて又三百やかくら銭  
 家乃風ふかせ弟子哉かくら笛  
 神楽笛や和哥吹上に玉津嶋

同伊東氏	同中井氏	同黒沢氏	湯沢住伊藤氏	同松井氏	同水野氏	同正氏	同家得	仙北横はり住	山田成子氏	吉度	石州	熊野住	江州	仙北横手住	永元	秋保	同政	一入
古	耀	重	翁	治	順	重	友	直	度	吟	直	満	久	元	友	全	成	入
	二四オ								二四ウ						二五オ			

をそれなから我も面白し神々楽  
 宜禰か為や惜からさりし神楽料  
 御神楽や人うやまつて神力ます  
 我からと鈴こそふらめ神楽神子  
 小男鹿の御耳を笛てかくら哉  
 御火焼  
 御火焼しよ我も蘇民か子しや孫しや  
 髪置にむすひこめつや頭の霜  
 鉢扣  
 声をほに上るや茶筌鉢扣  
 修行にやいて其時の鉢扣  
 四辻を四つ時行やはち扣  
 御仏事  
 お霜月さてハ聴聞も今なるへし  
 お仏事やおもてうらなき心さし  
 極楽や今此娑婆にお取こし  
 寒念仏  
 鐘をもつて冬になりけり寒念仏  
 雑冬  
 八東は集竟宴の興行に  
 八東ほの年貢納や巻之終  
 霜月廿三日ある御門主にて

秋田住	金沢住	桂	季	皆山公	少好	桂	得	三	湖
保	軒	葉	吟	公	蝶	葉	友	禮	春
千	三				二六オ				二六ウ

立花に白き梅擬を見侍りて

年の内に春面白し梅もとき

風乃子と目なしとちする冬木哉

松風へねふれる山乃いひき哉

てんかくに菜めしハけふの菩薩哉

ふく汁に惜からさりし命かな

風寒し万民これをせうか酒

薬喰や鹿乃音おろす出刃包丁

黍の寒さらしすとて

けふといへハもろこし迄や寒沢(ママ)

寒さらし葛の白根や吉野川

八束穂集発句冬之下

寒梅

花の兄や冬木乃中の器量者

冬咲ハ好文はく乃小序かな

冬月

天酒にも酔るや月乃あから只

雪乃山出入月や白ねつミ

達磨忌

達磨忌ハ後生禅宗乃勤哉

達磨忌や直指にんしんひたし物

年忘

会席や花をやり句に年忘

野代住 季 吟

大坂 仙 室

如 宗 丹

温 種 成 風

三 保 風

秋田(矢野) 仙 室

仙北田合氏 貞 通

秋田梅津氏 不 真

野代住 政 悦

湯沢住 三 禧

秋田梅津氏 光 頼

年木

年木こそいと、桜ハ目出木、

餅突

餅つきやちきりのすゑハ花乃春

節分 付宝船

打豆の数やつもりて鬼万国

大豆に鬼いにしへも去ためしあり

今夜そ豆うつゝ乃鬼に向ふかこく

豆のをと鬼ハ木すゑの雨かはらん

鬼乃目の泪乃数か節分の豆

忠雄殿千句に巻軸を

君か世乃宝船なりあたけ丸

はや墨乃絵に着にけり宝船

除夜

まめやかなこゝろ乃水や鬼あつてらひ

角松をともしつけてや鬼やらひ

歳暮

年すてにほそい句すへしけふの暮

よらハよれあすハ若やかん年の暮

心ほそく連行年やねつミの尾

将某のミかひま行駒も年の詰

暮て年早駕籠にしてあすハ馬

日々記や椿数以上としの暮

三国住 辰

若州 治

野代住 安

同金沢氏 寛

少 吉

桂 吟

秋 成

仙北 光

秋田川村氏 重

野代小玉氏 少

吉 蝶

湖 春

野代眞氏 貞 室

同中井氏 昌 治

堺 三 耀

野代岡本氏 宗 栄

なかれ行年やしち種さそふ水  
なかれ行年へしら川夜舟かな  
旅籠町暮行年よとまらんせ  
流ぬる年や先しる膝かしら  
夜部までへあすも有しを年の暮  
年まかりよるにも成ぬけふの暮  
正月やいやしやなけれと年の暮  
立年の花の前句よけふの暮  
懐帯なり上句に祝ふ年の暮  
月も日も気もつまり行蔵暮哉  
おしむ世にすて鐘へなそ年の暮  
寒声も今宵をきりのうたひ哉  
掛乞や初夜より後夜乃一点迄  
行年のおしくも有哉すたり掛  
年の花や入相の鐘におつこもり

聞

さいまつや二度目乃てつち十二月  
しからミかなかるゝ年のうるふ月  
節米やあまつてたらぬ年の暮  
らう月に聞有明や二度乃かけ

星 仏 売

買得たり月より嬉し星私

越後住 無 倫 常 能 信 禧 吟 古 智 真 說 房 英 円 交 業 正 栄 能 葉 吉

野代住 影 俊 三 三 季 友 友 大 秋 松 宇 佐 大 角 桂 野 仙 野 柏 善

三〇オ

三〇ウ

三二オ

岡 見

岡見するや養毛を立る梢の鶯

年 内 立 春

年の内に立や飛入乃花の春

年乃内へあし長にくる春日哉

あら玉や先一分奉年の内

八 束 穂 作 者 并 句 引

(注・カッコ内は、春・冬の巻の句)  
(脇に掲載された本姓又は居住地)

山 城 国 四 十 二 人

千丸公一 皆山公一 季吟六十六 湖春五十 正立十九 可全

(大村氏) 六 友静二十 卜全二 栄也一 春丸(□吹氏) 二

元隣三千之(望月氏) 三 如風七 千春(望月氏) 二 静之

(井得氏) 一 善林一 一加一 眠松四 若松(幸氏) 七 貞敦

一 備延一 少魚(山本氏) 六 及甫(中西氏) 二 治休(間杉

氏) 一(□三三オ) 貞恕四 宗休一 貞室二 一得一 康吉一

誰子一 招友一 正貞一 折井氏重次一 興政(長谷川氏) 一 行

安一 正次(安福氏) 一 折井氏重安一 山下氏如鱗一 有清一

正盛(原田氏) 三 随流一 河合氏秀就二

大 和 国 一 人

周可一

和 泉 国 五 人(□三二ウ)

宗満(辻氏) 十 幽明十一 長之四 元順(堺) 二 随運一

梅翁四 如貞二 保友十五 西鶴一 宗円(木原氏) 十 温壺四

一 清(有馬氏、大坂) 八 竹油(伊丹) 四 龜丸(上嶋氏、伊

丹)二三重(伊丹、十三歳)四 貞之五 助音七 柳翠一 国  
茂一 成林(高岡氏)四 重行一 玖也一 由平一 小柴一〔  
三三才〕 林安一 生行一 秀之一 即提二 生重(鶴川氏)一  
袖岡氏(政之)一 治房(上嶋氏、伊丹)三

伊賀国 二人

忠辰二 戲言二

伊勢国 四十三人

久居任口十二 松坂住三信廿九 山田喜卓貞幸十八 松坂三保三十五  
同三禮(竹内氏)四十九 同卷女二 山田住定清(荒木田氏)一  
山田住清忠四 中村氏清敷三 小林政利一 松坂住三好六 友巳二〔  
三三才〕 松坂三宣二 同吉度(成子氏)三 同三俊(世太氏)十  
同陽泰子一 同三林二 同三思(小津氏)三 直好一 山田武清一  
松坂松女四 松苺一 松女祖母一 同淨井院存的二 同小山氏勾当一  
竹内氏流也一 朝熊住政安四 成博三 同小山氏家春一 慶繁院謙也一  
乙部氏狡心一 竹内久信一 吉谷氏三寛一 山田嘉国三 同度会氏全彦  
一 同世木氏定光一 同武珍二 同延高一 同信房一 同慶彦(度会  
氏)二 青木氏而已(山田)一 正広一 松坂円説一〔三四才〕

尾張国 六人

名震屋住任風十九 同雀巢五 六友一 同千声子(一脱) 同流水一  
同未醉(柳氏)一

近江国 九人

海津磯野氏幾久四 柳川住一以二 海津住信言八 大津住一吟二 八幡住  
有信(辻氏)一 海津住得友(磯野氏)十三 大溝住宗敬一 寄近  
(柳川)一 今津住勝信(安達氏)四

美濃国 一人  
鈴木氏重澄一  
〔三四才〕

三河国 二人

亀毛一 耕月一

駿河国 二人

大宮住友雪一 梅友(大宮)二

武蔵国 二十四人

江戸住和松三 玄札四 蝶々子二十二 梅友一 忠虎一 満政一  
小嶋氏勝信四 山本氏鹿友二〔三五才〕 木切一 黄吻五 少心二  
調和一 永元一 立和三 未琢一 可別一 寛春一 観了一 似  
春三 仙風一 慶豊一 一毛一 良長(中越氏)一 幽山一

甲斐国 二人

安信一 安貞一

信濃国 七人

高遠住友心三 茂房一 道察一 一友一〔三五才〕 不春一 重

堯(高遠)一 淨土寺臨普一

大隅国 一人

牧意一

日向国 一人

元易一

阿波国 一人

未了一

讃岐国 一人〔三六才〕

正範一

伊予国 一人

正子(松山) 一

石見国 四人(マ)

川北氏恒利一 克行二 竹田氏元正一 政直三 藤井氏重良一

若狹国 三人

小浜住今武(川越氏)三 高浜住治徳六 小浜住定安二〔一三六ウ〕

丹波国 三人

ふくち山久好三 同久林一 同笑元一

紀伊国 九人

名高浦一入子八 一入子女長女三 丹尾氏重安一 熊野住一政一 和哥山

住元上一 大野住僧貞空二 浜中住僧梅心一 熊野住俊満三 矢舟氏

母一

肥前国 一人

戸沢住玄清一

〔一三七オ〕

肥後国 一人

久継一(注・他に春26オに、肥後住円智の句がある)

筑前国 四人

種成(森氏)十八 亦桑一 長平二 自次二

安芸国 一人

戸久嶋住友古(広嶋氏)一

越前国 二十二

教賀住光林一 同正次(寺田氏)一 同正利一 同久武一〔一三七ウ〕

家直(橋爪氏、教賀) 家直母四 好次一 自朋一 清信二 新

保住打雨軒一 同秀自一 同高貫三 同幸隆一 保歩一 三国住可吟

一 不言二 同負辰(三国)四 同正勝一 同可夕三 新保治之一  
不求一 福井住可郷一

加賀国 十一人

金沢住由歌(浅野氏)十 同貞之五 同目元八 同正之三 同一煙一

同可得二 友琴一 松住住薫煙一〔一三八オ〕 松住友信四 宮腰住一

平二 間之五

佐渡国 四人

春直一 酒盛一 春興一 重英一

越後国 三人

高田志村氏無倫五 柏崎善吉一 同正治一

陸奥国 二十五人

岩城風鈴軒十九 盛岡住幽閑(太田氏)九 同景治(黒崎氏)一

同遊加一 同重賀一 松葉一 同順意二 秀将五〔一三八ウ〕 政

武三 勝重二 政朋二 孝寛一 長意二 昌成一 与徳一 友広

二 正焉二 虎銘三 清次(石川氏、南部)四 正尹一 正城一

僧欣応二 自器一 政香(田名部)二 津軽住友金(山本氏)一

出羽国

最上 十三人

山形住未寛三 同窓索十 同一吟一 同一友二〔一三九オ〕 泉式五

友英(札野氏)二 直信二 定章一行保一 経貞一 無勝一

僧額翁一 会津住元貞(二平氏)一

庄内 八人

酒田住潮風一 随吟(酒田)五 重厚三 安種三 一竹二 徳治一

安親一 本庄注注・現秋田県本莊市 歳要一

秋田城下 百三八

梅津氏忠雄九 同氏淡水十四 同氏不真十 黒沢氏元重三〔一〕三九ウ  
 大藤氏仙室十一 武士氏千胤三 白土氏不可三 眞壁氏充幹十 田代氏  
 求芳一 相沢氏里長二 大藤氏寛久二 菅谷氏家貞二 武士氏桂哉九  
 根岸氏方秀三 木内氏真俊三 如帆一 大橋氏永春一 小嶋氏盛以二  
 守久六 棚谷氏行忠二 川村氏宜秋十七 小嶋氏栄久二 菊屋関心七  
 上山氏光定二 山方氏泰賢四 幸氏一若二 風誰五 加納氏松嵐二十  
 一 青木氏遅牛八 菊地氏自牧軒三 大和田氏可随四 白土氏定安一  
 大藤氏斜月二 久和村氏夏雲七 鈴木氏南朝十八 船木氏臥雲七〔一〕四  
 〇才〕松倉氏茅軒三 今村氏井縷二 川村氏尚友子三 今村氏好信二  
 栗栖氏時入九 杉淵氏春松四 片岡氏奇悦二 喜早氏長徳三 菊谷氏以  
 音三 富田氏正竹〔行力〕五 森氏政成十八 菊地氏尹長二 石川氏清  
 有二 山村氏時風一 後藤氏三全十三 佐々木氏松栄五 藤林氏可養二  
 菊谷氏関心三 加藤氏好計一 暁長一 久和村氏雅茂二 菊谷氏種月一  
 備不必一 備浄貞一 久和氏重直一 藤木氏友平三 渡辺氏久治三  
 野谷氏無心二 上田氏捨言二 喜早氏清弘二 岩木氏一不二 中野氏三  
 望二〔一〕四〇ウ〕津田氏嘉慶七 大窪氏可悦一 浅井氏初心一 武田氏  
 正之一 細田氏茂昭四 竹内氏光政三 牧野氏重信二 関口氏直勝五  
 塩谷氏綱道一 柴田氏光智一 大橋氏久年一 竹内氏自習一 葛葉一  
 野口氏友留三 為昌一 射和氏重貞一 樺流一 櫻尾氏夕柴一 松岡氏  
 求悦一 林鹿〔山本氏〕一 忠利一 湊住吉井氏秋長一 小嶋嶋住佐  
 藤氏三友一 同住釣翁一 小嶋住意蝶一 同菊谷氏心拙一 城下多一一  
 吉川氏宗吉一 中井氏治賢一 大谷氏喜延一 城下以広二 小嶋住包好  
 一〔一〕四一才〕川村重弘一 中野氏喜貞一 井上正茂一

仙北 七十四人

源氏治貞三 赤坂氏光温一 源谷光天三 角館安藤貞春三 安藤氏貞利  
 八 山田氏重道三 角館住師英〔木水氏〕五 同重風一 同貞好三  
 同人也二 同政次〔鶴屋〕五 同似永二 同定安三 同政信一 同  
 直下二 同可交四 同一詠四 同不器三 同不絶一 同昌量一 同  
 為貞三 同不深子二 同恒定一 同可綱一〔一〕四二ウ〕同利吉一  
 石川氏忠利一 同守利一 同吉智一 同竹之助一 湯沢住友之五 同  
 友治〔松井氏〕八 同公綱〔佐々木氏〕四 同公頼二 同久家一  
 同忠次一 重旨五 清厚〔湯沢〕二 正重一 同秀応一 同家直一  
 同種盛一 同金氏秀門一 同高弘〔芳賀氏〕一 田谷氏貞通一 同蛸  
 翁〔伊藤氏〕一 家重七 同秀治一 横手住源氏貞治三 同永元一  
 茂木氏知胡一 よこて住育都二 同勝美三 信行院良信一 よこて重略  
 一 同昌長二 谷口氏忠倚三〔一〕四二才〕信行院良悦一 よこて久吉  
 一 同意休一 赤坂氏光成六 浅舞住一栄五 同栄吉一 玄福寺露玄  
 一 横堀住元光二 同家吉一 同頼直二 院内平都一 赤坂露舟一  
 水野氏正順一 六郷住宗易二 同吉卿二 横はり正直二 院内高家一  
 角間川住了一

比内三十二人 阿仁三人  
 大たて住成芳三 古内氏幸渡一 戸井氏定重三 堀氏勝由二 山田〇秀  
 治四 千代都五 小玉氏経藩三 清水氏直央二〔一〕四二ウ〕小枝氏重  
 利一 同氏定央一 堀氏勝芳二 直良一 陣治一 梅雪一 関口氏  
 直継一 扇田住家充五 嘉用六 為時二 大たて住玄智三 十二所住  
 親勝二 同伸之一 阿仁奈良岡氏俊門三 同氏俊満一 松岡氏重温三  
 野代 六十二人

山方泰九六 岡氏泰宜一 柳谷氏直言十 伊東氏朝雨軒政古二一 山方  
氏貞直二 宮腰安正十一 小玉氏重吉十六 三耀(中井氏)二十二  
飯村氏昌治十三 宇野氏親房九 利生院為心二 宮腰通忠四(「四三才」)  
願勝寺竹霧四 玳庵寺塵外三 大洲氏綱充四 一明院栄友三 金沢氏寛  
吉五 親光三 宮腰俊能十六 柳谷直治一 飯村清吉七 岡本氏宗栄  
六 増谷氏正光四 小玉氏成吉十九 宮腰吉之一 伊東氏長徳四 宮腰  
吉次三 飯村一昌四 橋森氏信言三 清水氏政満一 飯村氏湖雲二 岡  
氏万慶一 清水氏政保二 浅野氏入可一 浄光二 盛之三 宇野氏万  
太二 金谷氏政治一 三耀息半十一 通尚三 宮腰安次一 柳谷氏直  
忠五 是川氏好秀六 熊谷氏直重一(「四三才」) 長浜氏忠由二 忠久  
一 伊藤氏茂喬五 光文二 光二一 宗房一 成辰一 小玉氏重友一  
飯村青口一 柴田氏正忠二 政悦一 影常一 柳谷氏安之一 増谷氏  
正徳一 飛根住大高氏方時一 松木氏泰栄一 少蝶六十六 晩翠堂桂葉  
百九十七

## 新刊紹介

岡 一男著

### 古典の再評価

— 文芸科学の樹立へ —

名著『古典と作家』につづく岡博士の第  
二論文集。前後二十五年間に発表された古  
代・中古・中世の古典研究のうち、紫式部

・源氏物語論を中心に、上は魏志倭人伝・  
古事記論から、下は問わすがたり・徒然草  
論に至るまでの珠玉六十五編が収録されて  
いる。本書の構成は「総説」「古代前期」  
「古代後期」「中世」「結語」となっており、  
著者が長らく早大で講じて来た「日本文学  
主潮」の方法と古代・中世文学史の鳥瞰も  
可能なように配慮されている。その世界文  
芸史的立場からの巨視的な視座と、微視的

作者 五百五十三人 国数三十三ヶ国  
句数 式千百三十五句 (「四四〇」)

(「四四ウ空白」)

やつかほといふあほうしハ千はやふるき世世のおはんことの葉  
なるを慈父桂葉か集し此度の筆彙の名にしかあやかしかかうふら  
しめつ依之伊勢桜にあつらへて晩翠乃野堂に残し置侍らんとすか  
く残し置侍らハ千丈の春乃堤にハ蟬穴の恙なく(「四五〇」) 万町  
の秋の田つらにハ八握の穂ひけを句作り添んすきもの猶はたくハ  
ざりめやといふ乃ふる宝七とせ乃春秋田住平賀氏少蝶慈父の命  
いなひかたく此集のあとを飾わらの内にして露はかりくるめ侍る  
ならし (「四五ウ」)

延宝八 庚申年

五月 吉日

武村三郎兵衛板行

な論証とを統一した方法の、新鮮な文芸観  
と古典の再評価とは、広く学界・一般読書  
界に感銘を与え、長谷川泉氏は「週刊読書  
人」(昭和四十二年十月二十三日号)  
で、一九六八年の国語国  
文学個別研究の筆頭に本書をあげて、文芸  
科学の樹立をめざす著者の意欲を高く評価  
された。(有精堂、昭和四十三年六月刊、  
A5判、箱入、六二〇頁、三八〇〇円)

(増淵勝一)